

北方民族の祭天儀式における拝礼方向

今井 秀 周

はじめに

神を祭るとき、儀式はたいいてい特定の方向を向いて行われる。高度に発達した現代の宗教では、特別な建築物を設け、その中の祭壇や宗教シンボルに向かって礼拝している。或はまたその教義の中に定められた方向に向かって礼拝することもある。

こうしたことは、歴史上の民族の原始宗教にもあった。原始宗教で祭られたのは主に自然界の神であり、礼拝は普通その神が在す方向に向って行われた。例えば川の神を祭るには、その川の前で川を見ながら礼拝したし、その川が遠くにある場合には遥拝、すなわちその川のある方向に向かって礼拝した。

それならば天の神を祭るときはどうしたのだろうか。試みに自分で天を祭ることを考えてみる。そこで天を祭るにふさわしい方向はというと、これは意外と難題である。天は高く広く、あらゆる方向を蓋う存在だからである。いったいどの方向を見て祭るのがよいだろうか。

西はアルタイ山脈やモンゴル高原から、東は満洲地域にかけて活動した歴史上の諸民族、いわゆる北方民族が、天神を信仰しシャマニズム儀式を行ったことはよく知られている。彼らがどこを見て天を祭ったかを調べたところ、それはほぼ一定していた。彼らは祭壇を、主として西方もしくは南方に置き、西向南向して天を拝していた。

あまねく上空を覆う天を、特定の方向に祭ったというのは面白い。しかも拝天の方向は、地域的に分かれていたようであり、時代によって変

化したようで、これは興味をそそる事象である。そこで拙稿では、こうした事実を明らかにし、各拝礼方向がどのような理由によって選ばれたかを論じてみたい。

儀式のときの拝礼方向は、あまり目立たない部分であるが、宗教思想はこうしたところにも込められる。不明な点が多い古代北方民族の宗教観念の解明には、これも貴重な手懸りとなる。この問題について歴史記録から検討した論考は、鄙見の及ぶ限りこれまでにない。

一 歴史記録に見える拝礼方向

まずは歴史上の民族が行った祭天儀式での拝礼方向を見る。史料の配列は時代順である。

(一) 鮮卑北魏の西郊(西向)

拝礼した方向が分かる最も古いものは、北魏を建てた鮮卑拓跋氏の行った祭天儀式である。

北魏ではシャマニズムの祭天儀式を西郊と称した。都の西の郊外で行ったから、この名がある。拓跋は中国的な国家を目指して国づくりを進め、中国伝統の祭天儀式である郊祀を実施したが、その一方で彼らは民族精神の象徴として、シャマニズムの祭天儀式も維持した。

天賜二年夏四月、復祀天于西郊、為方壇一、置木主七於上、東為二陛、無等、周垣四門、門各依其方色為名、牲用白犢・黃駒・白羊各一、祭之日、帝御大駕、百官及賓國諸部大人、畢從至郊所、帝立青門内近南壇西、内朝臣、皆位於帝北、外朝臣及大人、咸位於青門之外、后率六宮、從黑門入、列於青門内近北、並西面、廩犧令、掌牲、陳於壇前、女巫執鼓、立於陛之東、西面、選帝之十族子弟七人、執酒、在巫南、西面、北上、女巫升壇、搖鼓、帝拜、后肅拜、百官内外、尽拜、

祀訖、復拜、拜訖、乃殺牲、執酒七人、西向、以酒灑天神主、復拜、如此者七、礼畢而返、
〔魏書〕卷一〇八の一、礼志二

西郊の祭場には、西部に壇が設けられ、壇上に七つの木主が東向きに立てられた。木主は天神の神像である^①。そして皇帝はその前で西向して天を拝した。

(二) 鮮卑北魏の即位式(西向)

次にあげるのは鮮卑が行った幾つかの即位式である。国が行う祭天儀式には、定例の国家大祭のほかにも、さまざまな目的のものがあつた。即位式は、位に即いた事を天神に報告し感謝する儀式であり、祭天儀式の一種に外ならない。

北魏の太祖道武帝が代王の位に即いたとき、この儀式は西を向いて行われた。

太祖登国元年、即代王位於牛川、西向設祭、告天成礼、

〔魏書〕卷一〇八之一、礼志二

ここに儀式の詳細は書かれていないが、鮮卑拓跋氏は元来シャマニズムを信奉する民族であつたから、この即位儀式はシャマニズムに従つたものに違いない。

このあと道武帝は都を平城に奠め、北魏の皇帝の位に即いた。そのときには中国の礼式を採用した。道武帝につづく皇帝の即位式はさらに中国風に整えられていき、孝文帝のときには純中国式となつた。しかし北魏も末期になると、孝武帝は即位式にシャマニズムの西向の拝天礼を復活した。おそらく、殆ど中国文化に呑み込まれてしまった民族精神を取り戻そうと図つたのであろう。

即位于東郭之外、用代都旧制、以黑氍毹七人、飲居其一、帝於氍毹上、西向拜天訖、自東陽・雲龍門入、

〔北史〕卷五、魏孝武帝紀

また北魏を倒した鮮卑宇文氏の西魏には、初代の文帝が即位式を城外

西方で行つたという記録がある。

大統元年春正月戊申、皇帝即位於城西、

〔北史〕卷五、西魏文帝紀

このとき城の西が選ばれたのは、北魏の西郊と同じである。西魏文帝の即位式は、城西において、やはり西向して行われたものと推察する^②。以上史料(一)(二)によれば、鮮卑が祭天のとき西の位置や方角を尊び、西向して天を拝したことが明らかである。

(三) 契丹遼の祭山儀(西向)

鮮卑のあと中国北方に勢力を伸張した契丹の耶律氏は、遼朝を建て、彼らの聖地であつた木葉山において祭山儀と称するシャマニズムの祭天儀式を行った。

祭山儀、設天神・地祇位于木葉山、東郷、中立君樹、前植羣樹、以像朝班、又偶植二樹、以為神門、皇帝・皇后至、夷離畢具礼儀、牲用赭白馬・玄牛・赤白羊、皆牡、僕臣曰旗鼓拽刺、殺牲、体割、懸之君樹、太巫以酒醑牲、礼官曰敵烈麻都、奏儀辨、

〔遼史〕卷四九、礼志二

遼は中国の北部を所領として取り込み、中国の農耕生産を大いに利用した。しかし遼は、中国を支配した他の北方民族とは違って、中国王朝伝統の郊祀を行わなかつた^③。中国の華やかな儀礼文化の影響を受けながらも、遼は終世、シャマニズムの祭天儀式である祭山儀を国家最高の祭りとした。

祭山儀では様々な神が祭られたが、最も重要な神は、契丹の諸族が普遍的に崇拜していた天神であつた。祭山儀の祭場は東向きに作られ、天神の神位が、地神の神位とともに祭場の西端に立てられた。遼の祭山儀は幾種もの祭天儀式を集めて成つていた。この天地の神位は、おそらく中国郊祀の神位を導入して作られたものであろう。その前に立てられた君樹・群樹という小樹木群は、契丹耶律氏が昔から用いてきた祭壇であ

ろう。⁽⁴⁾

ともかく契丹耶律氏も、鮮卑と同じように、祭壇を東向きに設け西向して天を拝していた。

(四) モンゴルの祭天儀式(南向)

モンゴル帝国のモンゴル人が天を崇拝したことは、歴史記録の随処に天を称えた言葉があり、帝国の命令が必ず天の名のもとに下されたことなどから明白であるが、彼らの祭天儀式を伝えた記録はごく少ない。それでも祭天のときの拝礼方向については、これを窺える記録がある。

使徒聖バルトロメオの祝日までおりますと、その日に、非常な群衆が集まって来ました。これらの人々は南面して立ち、あるものはほかのものから石を投げてとどくくらいの距離に並んで、しだいに前へ前へと歩きつづけながら、祈祷をとなえ、南にむかつて跪きました。しかしわたしどもには、かれらが呪文をとなえているのか、神にむかつて跪いているのか、それともべつのもにむかつてそうしているのか、わかりませんでしたから、跪くのは嫌でした。かれらは相当ながいあいだこんなことをしてから、例の天幕にもどつて、クユクを皇帝の玉座にすわらせ、まず首長たち、ついで人々が全部、クユクの前に跪きました。……

(護雅夫訳「プラノカルピニのジョン修道士の旅行記」第九章)

これはキリスト教修道士カルピニが実見した、帝国第三代グユク・ハーンの即位式の模様である。このときカルピニには、モンゴル人がなぜ南に向かつて跪いているのか、理解できなかったようであるが、これはモンゴルの拝天礼に違いはない。北方民族は即位式において必ず天を祭った。グユクが玉座に座つたのは、この跪拝の後だったから、この跪拝はまちがいになく拝天礼である。したがってこの記録によれば、モンゴル人の祭天時の方向は南である。

モンゴルには、彼らが極めて天を崇拝していたにもかかわらず、祭天

儀式の記録が少ない。また太陽を崇める言葉がほとんど無いにもかかわらず、太陽を祭った記録が多い。このことから筆者は、モンゴルが太陽を祭ったという記録の大部分は、実は祭天であつたと考える。おそらくモンゴル人は天を、太陽を通して祭っていたのであろう。何もない空を仰ぐよりも、天の神の一つである太陽を見ながら祭るほうが、信仰心を集中しやすい。

ただ太陽の位置はたえず変化する。グユクの即位式の時、カルピニにモンゴル人の行動がよくわからなかったところを見ると、モンゴル人が跪いた南の方角には、何も無かつたのかもしれない。つまり地上にくに祭壇らしいものがなく、太陽もその方向の空に無かつたのかもしれない。もしそうだったとすれば、モンゴルの正式な祭天では、太陽がそこに有るか無いかに関わらず南を向くのがきまりであつたということになる。モンゴルが建てた元朝では酒馬奴子と呼ばれる祭天が行われた⁽⁵⁾。そのときの儀式もおそらく南向であつたと考えられる。

(五) 満洲族清の堂子の儀(南向)

清代の女真、すなわち満洲族の愛親覺羅氏は、堂子とよぶ祭殿でシャマニズムの祭天儀式を行つた。これは清朝を建てる前からの習慣であつた。

太祖高皇帝建国之初、有謁拜堂子之礼、凡每歲元旦及月朔、国有大事、則為祈為報、皆恭詣堂子行礼、大出入必告、出征凱旋、則列纛而告典至重也、
(『皇朝文獻通考』卷九九、郊社考九)

愛親覺羅氏の清朝は、中国正統の王朝として郊祀を行い⁽⁶⁾、そのために設けた天壇や地壇は現存して有名である。しかし清朝皇帝にとっては堂子の儀が、郊祀以上に重要な儀式であつた。堂子は紫禁城内の東南位置に建てられ、皇帝は毎年元旦、また国家に大事がある度にここで天を親祭した。

この堂子の祭りで、皇帝はどちらの方向を見て祭つたのかといえ

南である。堂子の祭儀については石橋丑雄氏の文献・調査研究があり、方向が正確にわかる。その著『北平の薩満教に就て』によれば、堂子はいくつかの建物で構成されていて、祭天儀式は拜天圓殿で行われた。皇帝は二つの宮門を通り、階を一つ上がって拜天圓殿に到った。拜天圓殿の南の広場にはたくさんの石座があり、この上に神杆とよばれる祭天のための木柱が立てられていた。皇帝用の神杆が中央にあり、その両側に皇子、親王用の神杆が三十六基ずつ並んでいる。皇帝らは拜天圓殿から、真南にある神杆に向かって、三跪九拝の礼を行ったという。

堂子の儀は皇帝とその一族しか参加できない密儀であつたが、一般の満洲人の間でも、これとほぼ同様の儀式が行われていた。その儀式は祭天儀とよばれ、家屋正房前庭の南もしくは東南位置に神杆を立て、家族全員が集まって犠牲の豚を供え、南向して神杆を拝した。こうした祭天習俗は、満洲人の間に古来広範にあつたもので、首長一族が特別に殿屋を設けたのが堂子の儀であらう。この南向の拜天礼は後述するように、おそらく金代から続いてきたものである⁽⁸⁾。

以上、中国清朝以前の北方民族について、祭天時の拝礼方向が明らかに記録のすべてを掲げた。鮮卑の拓跋氏、契丹の耶律氏は西向し、モンゴルのチンギス一族、満洲族の愛親覚羅氏は南向していた。

これらの民族はみな中国北方に、あるいはユーラシアに跨つて強国を築いたが、いずれの国も、多くの部族から成る部族連合国家であつた。とすれば、部族が違えば、儀式の形や拝礼方向も違った可能性がある。しかし、そうしたことも一部にはあつたかもしれないが、おそらく大部分の部族は、首長の部族と同様の儀式を行い、同じ方向に拝礼していたと考えられる。そもそも各民族は、旧来ほぼ同じ地域、自然環境に生活し、ほぼ同じ神々を尊んでいたわけで、それゆえに連帯感が高まり易く、強大な国家を形成できたのである。他の民族に征服され吸収されると、また事情は変わるが、同じ民族として活動している間は、みな相似たシャ

マニズム儀式を行ったと考えてよいであらう。また一般的にいつて、多くの部族が一つの国家を形成した場合、首長一族が行う祭儀形式は、連合体の象徴として各部族の祭祀の典範となるものであろう。鮮卑の北魏、契丹の遼、モンゴルのモンゴル帝国、満洲族の清の時代、国の力が及ぶ地域では大抵、帝室とほぼ同じ形式の祭天儀式が行われたと考えられる。

二 調査記録に見える拝礼方向

次に近時の調査報告に記された拝礼方向を見る。

近現代、北方民族のシャマニズムは衰退の一端をたどった。モンゴル高原では、元朝政権と結びついて教線を拡張したチベット仏教が、元朝滅亡後も勢力を伸ばし、隅々の地方までシャマニズムの信者を吸収した。満洲には、満洲族が南下して清朝を建てると、中国の仏教や道教の流入が強まった。中国に入った満洲族は、前章記録(五)で述べたように、祭天儀式を堅持した。しかしシャマニズムは中国宗教と混交し、満洲族は仏教や道教の神々をシャマニズムの神々よりも上位に祭るようになった。北方のシベリアでは、ロシアが東漸してキリスト教を広め、やがてシャマニズムを邪教として排斥した。かつて北アジアに普遍的にあつたシャマニズムも、こうした歴史のすえ、近時ではごく限られた所にわずかに残存するという状況になつてしまった。ここにはそうしたシャマニズム文化を实地調査した記録から、儀式の形態および拝礼方向が詳細に捉えられているもののいくつかを引く。記録の配列は調査時期順である。

(一) オロチヨンの儀式(一九三五年調査、東向)

東向のテントの入口に一对の樺木神杆(土語(土)を)を立て、之に横木を渡して恰も鳥居の如く、当日獲た獐の生肉・臓物等の鮮血滴るものを懸け供へて、側に灰搔きに烟草屑を燃やして香烟を上げ、サマニは神装厳めしく神鼓を左手に持ち、神杆に向つてテントの入口近

くに坐して、鼓を打ち体を動かす毎に神衣の鈴鏡の音が锵々と鳴る。
……尚この樺木神杆は枝附のもので形状稍鹿角に類し、それは鹿の獲物を祈る意味でもあるといふことで、行事が終れば之をテントの前方又は左右の遠方に持ち行いて清浄なる場所に東を向けて立てかけ、決してテントの後方に持ち行かないのは東方を尊ぶ風らしく、太陽崇拜と関係があるやうに思はれる⁽⁹⁾。

右は一九三五年、秋葉隆氏らによる大興安嶺の狩猟民オロチョン族の調査記録である。ここにはどのような神を祭ったか書かれていないが、これは狩の獲物を神に感謝するための儀式であり、祭天儀式の一つと見てよい。オロチョンなど大興安嶺の狩猟遊牧民が信仰する神は、後の調査記録(二)(三)に述べられるように非常に多い。このため祭天儀式といっても、いったいどのような神を祭っているのかはつきりしないことが少なくない。しかしいづれにしても、神は天上に在った。そして天上にある神を祭るときの方角は一定していた。右のオロチョンの場合、東向させたテントの前方にトル(oo)とよぶ祭壇を設け、シャマンは東向して儀式を行っている。つまり拝礼方向は東である。

右の儀式は秋葉氏が実際に体験したものであるが、氏はまた数年に一度行われる大規模な儀式についても聞き取り調査を行い、次のように記録した。

三年又は五年に一回、或は悪疫流行の場合などには、臨時に行はれるサマンの大祭があつて、之をOemattanと云う。この時は特に行事の為に大テントを作つて祭場となし、その入り口より二三間の外に当日早朝高さ2間半位の黒樺の神杆を立て、之から綱を張つてテント内の小神杆に結び、屋外に大巫屋内に小巫がゐる、大巫は東方より日を迎へて屋内の小巫に伝へ、両巫屋内で神杆を間にして唱歌舞踏旋回する⁽¹⁰⁾。

この説明によれば、オロチョンが大祭のとき天から迎え降ろした主神は、太陽神と理解される。

(二) ダフルの儀式 (一九三六年調査、南向)

ダフルはオロチョンと生活圏をほぼ同じくする狩猟民族である。泉靖二氏が一九三六年に行つた調査によれば、ダフルが祭る神には二つのグループがあつた。一つは常に彼らが守護神として祭る神々で、天帝、天神、地神、火神などのグループ、いまひとつは山神、山の獣、不幸な死に方をした人の鬼、風神などの悪霊などのグループであつた。また彼らのシャマンはそれぞれに狐・狼・蛇・火など自分の守護神を持っていた。その守護神の力によつて他の神々を呼ぶのだという。ダフルのシャマンは年に一度正月に、守護神に慰安の儀式を行つた。泉氏はそれを次のように記録している。

彼の家の南庭にomidanと称する神杆一本を立て更に坑の中に短いそれを二本立て、内外の神杆を布で連結して、そのサマンのidohan (nuは母の意、そのサマンをサマンになさしめたサマンのことである)を伴ひ来り、二人正装して、太鼓を打つて入巫し、二人で舞ひ天地の山神を神杆に呼び寄せる。外の神杆から布を伝はつて下つて来た神が室内の神杆に宿る瞬間、そのサマンにその神が乗り移り、神の名を高く叫ぶ。斯くして最後にサマンの守護神をnu-idohanの守護神の力で空中に放ち、外の神杆を伝つて坑の神杆に宿らしめて、凡べての神々が二本の神杆に下る。この祭は五日を要する大祭で、このサマンによつて、病気が治癒した者は凡べて此の坑に集り、牛を殺してその血を神々に捧げて終るのである⁽¹¹⁾。ここに見る祭壇の形状は、前節のオロチョンとほぼ同じである。テントは南向しており、天上から神を迎えるための柱はテントの正面とテント内に設けてあり、布で繋いである。つまりシャマンは南の方角から神を迎えたということであり、このダフルの拝礼方向は南である。

(三) オロチョンの祭儀 (一九九〇年調査、幕内)

オロチョンのトルとよばれる木柱は、一九九〇年代、王宏剛・関小雲

氏らが行った調査でも確認された。このときオロチョンの春秋の大祭では、一般住居よりも大きな斜仁柱とよばれるテントが東向きに立てられた。

斜仁柱の中央には、二本の柱を真つ直ぐに立てなければならぬ。オロチョン語ではトゥルと言ひ、つまり神架で、神が降臨する所である。二本の柱の頂点に、それぞれ赤い布と黄色い布を結び付けて、吉祥を示す。二本の柱の間で、地面から一尺あまりの高さの所に、横に一本の小さな柱を縛る。この横木は神の椅子を意味していて、シャーマンが神を迎えて神と交わる神聖な場所である⁽¹²⁾。

このときのトルは、調査記録(一)とは形状が違い、枝をすべて落とした真つ直ぐな柱である。またテント内にある。そしてシャーマンは神が降臨するこのトルの横木に座り、テント最奥に設えた祭壇に向かつて儀式を行った。このとき祭壇の最上段には太陽・月・星の神偶が置かれていた。

この儀式には、歴史記録と比べると変わったところがある。かつては、天上に在ると観念された神は、野外で祭るのが通例であった。太陽・月・星であれば、それは当然野外で祭られた。ところがこの大祭では、テントの外に木柱を立てていない。そして神をみなテントの中に祭っている。昔の人々がテント内に祭ったのは、普段の生活と密接に関わる神や、祖先神であった。そして毎日のようにこれを拝し、食事のたびごとに食物を捧げていた。そうしてみると、この現代のシャマニズム儀式は、儀式の規模も祭壇も、すべてが簡単になっていると言わなければならない。よってこの調査記録からは、祭天の方向は読み取らないことにする。この記録からは、オロチョンが祭祀用テントを必ず東に向けていることを確認するに止めたい。

なおこの祭りのときの神偶に天神の名がないが、それについて王氏らは次のように説明している。

春・秋の大祭中に、オロチョン族の人々が信仰するシャーマニズムの神々の大部分がまつられる。その中には、神偶や神図であらわす

神々があるが、一部分の神々、例えば天神、火神、シャーマンの祖師神、各民族の祖先神や女神などは、それらを象る神偶がない。また、それらの神々が祭壇に降臨するかどうかは、シャーマンの法術のレベルの高低によつて異なる⁽¹³⁾。

つまり天神は余りに高位の神であるため、偶像は作らないということである。そして天神はよほど高い法術を持つシャーマンしか祭ることができないという。古来北方民族は諸神を木やフェルトで偶像化して祭ったが、天神を偶像化することは少なかった。その理由はここにあったと考えられる。

近年、北方のシャマニズム文化を記録に留めようとする動きが盛んであるが、北方のシャマニズムはすでに他の宗教との混交が著しく進み、また儀式の規模が小さくなってしまった。しかし本章にひいた調査記録には、まだ古態がとどめられていると思う。本章に引用したものはわずかであるが、筆者が目撃した諸記録から見ると、現在行われている祭天の方向は、ほとんどが東と南である。ちなみにロシア周辺のシャマニズム資料を多数集めたウノ・ハルヴァの書も、北方民族の近年の祭天方向は東と南だと言っている⁽¹⁴⁾。

なお現在の北方の人々には、天を西向して祭ることは殆ど無いものの、西方を尊い方角と見る習慣がある。これについては次章でふれる。

三 西向して天を祭った理由

(一) 遊牧民のテントの向き

拝礼の方向が明らかな歴史記録のすべてと、調査記録の幾つかをあげたところで、次にその方向が選ばれたわけについて論じてみたい。

まずは古い記録に見える西向の形(第一章の(一)から(三))である。なぜ西向したかについて、古文獻にはもちろん何の説明もない。しかしよい手懸りがある。それは彼らの貴顕が常に東面して座っていたことで

ある。

たとえば北魏と同時代の北方民族柔然は、外国の使者を接見するとき
に東向した。

文帝悼皇后郁久閭氏、蠕蠕主阿那瓌之長女也、容貌端嚴、夙有成智、
大統初、蠕蠕屢犯北辺、文帝乃与約通好結婚、扶風王孚、受使奉迎、
蠕蠕俗、以東為貴、后之来、營幕戸席、一皆東向、車七百乘、馬萬疋、
馳千頭、到黑塩池、魏朝鹵簿文物始至、孚奏請正南面、后曰、我未
見魏主、故蠕蠕女也、魏仗向南、我自東面、孚無以辞、

〔北史〕卷一三、后妃上

唐代の北方民族回鶻の可汗は、結婚式するとき、可敦と共に東面して、
臣民の祝福を受けた。

既至虜庭、乃折吉日、冊公主為迴鶻可敦、可汗先升樓、東向坐、設
氍毹於樓下、以居公主、使羣胡主、教公主以胡法、公主始解唐服、
而衣胡服、以一嫗侍、出樓前西向拜、可汗坐而視、公主再俯拜訖、
復入氍毹中、解前所服、而披可敦服、通裾大襦、皆茜色、金飾冠如
角前指、後出樓俯拜可汗如初礼、虜先設大輿曲展、前設小座、相者
引公主升輿、迴紇九姓、相分負其輿、隨日右轉於庭者九、公主乃降
輿升樓、与可汗俱東向坐、自此臣下朝謁、并拜可敦、

〔旧唐書〕卷一九五、迴紇伝

唐のあと勢いを伸ばした契丹の遼は、皇帝のテントを東向して張り、
朝廷オールドのテント群を、東西を基軸として配置した。遼の諸城址には
宮殿が西北位置にあるという特徴があり、これは皇帝の東面にもとづい
たものと考えられている。また遼朝が国家制度を東西を基軸として構成
したことも、よく知られた事実である。⁽¹⁵⁾

遼俗、東嚮而尚左、御帳東嚮、遙輦九帳南嚮、皇族三父帳北嚮、東
西為經、南北為緯、故謂御營為横帳云、

〔遼史〕卷四五、百官志一、北面諸帳官

これらの記録を通じて明らかなのは、北方民族らは首長がつねに東面

し、臣下が西面する習慣を持っていたということである。この形は祭天
儀式の西向の形式とまったく同じである。つまり首長の位置に神位神像
を置けば、人はみな西向して拝する形となる。

北方民族が東面して座したのはテントを東向させていたからである。
北方民族がテントを東向させた理由ははっきりしている。北アジアは甚
だ寒冷な地域であり、そして強い西風が吹くからである。このためテン
トで生活しようとするれば、テントの入り口は、必ず風下の東に向けなけ
ればならない。そうするとテントの構造上、テントの主は常に東向する
ことになる。

北アジアでは今も遊牧が盛んで、完全なテント生活を送る人々がいる。
民族によって、また自然環境によって若干の違いはあるものの、そのテ
ントの形状や構造そして内部の利用方法は、みな極めて似通っている。
テントの底面はたいいてい円形である。この円形の内部で最も上等の場所
はどこかといえば、テントの一番奥である。そこは家長の座とされ、大
切な家財を入れた箱や、神棚などが置かれる。⁽¹⁶⁾ テントの最奥を最上の
場所とするのは、そこが円形の空間の中で扉から最も離れており、かつ
扉から入ってくる者と対面する位置だからであろう。こうした生活の仕
方は今も昔も同じであったと推察される。したがってテントの正面を東
に向ければ、テントの主も東向する。歴史上の北方民族の場合でいえば、
首長がテント内に座せば、その臣民はみな西向して仕えることになる。

さてこの位置関係をそのまま野外に出し、祭天の祭場設定に用いると、
まったく西向の形ができあがる。首長の位置に神位神像を置けば、首長
も臣民もみな西向して神を拝する形となる。祭天儀式を野外で行うのは、
自然信仰からいえば当然のことであろう。野外に出れば、天も日月も星も、
天空にある神々を直接目で見て拝することができる。また一般的にいっ
て、民族宗教の習俗は、その民族の生活習俗と深く関係し、その生活習
俗から生み出されるものである。こうした視座に立てば、北方民族の祭
天儀式での西向は、彼らの遊牧生活から生まれたと考えるのがよいであ

ろう。

なおテント内で一番奥、すなわち西側を最上の位置とし、ここに神棚を設けていれば、西という位置や方角が神聖なものとなるのは、自然のなりゆきであろう。現代北方に暮らす人々の多くが西を尊ぶ思想を持っているのは、きつとこれに因るものである。

(二) テントの向きと朝日崇拜の関係

北方民族のテントの向きについては、すでに掲げた史料以外にも、これを記したものが多し。契丹以前の民族について調べてみると、つぎのようである。

(匈奴) 单于朝出营、拜日之始生、夕拜月、其坐長左而北郷、

(『史記』卷一〇、匈奴伝)

(烏丸) 魏書曰、……以穹廬為宅、皆東向、(『三国志』魏書卷三〇、烏丸伝注)

以穹廬為舍、東開向日、(『後漢書』卷九〇、烏桓伝)

(突厥) 可汗恒処於都斤山、牙張東開、蓋敬日之所出也、

(『周書』卷五〇、異域伝下)

(契丹) 契丹好鬼而貴日、毎月朔旦、東向而拜日、其大会聚、視国事、皆

以東向為尊、四樓門屋、皆東向、(『新五代史』卷七二、四夷附録二)

遼俗、東嚮而尚左、御帳東嚮、

(『遼史』卷四五、百官志一、北面諸帳官)

これらによれば、確かにテントはみな東向である。匈奴の記録だけが北向となっているが、しかし匈奴のテントも通常は東向であったと考えられる。風向きは地形によって、あるいは季節によって変化することがある。また現在の遊牧生活者たちを見ると、主に東や南に向けるもの、季節や場所によつてはより快適な方向に向けることがある。つまり『史記』匈奴伝の記録は、たまたま匈奴がテントを北に向けているときに観察されたものであろう。この他に、常に北向したという記録がないことから、そのように理解すべきである。鮮卑のテントの向きに関する記録はない

が、史書は、鮮卑の習俗は烏丸に同じと伝えている⁽⁷⁾。そうであれば鮮卑のテントも東向していたに違いない。

ところで右の記録を眺めると、注目すべき点がある。どの記録も、テントの東向と太陽崇拜との関係を示唆していることである。突厥の記録には、はっきりと「牙帳(首長のテント)の東開は、日の出てくる方角を敬つてのことであろう」と書かれている。これは北方民族のテントの東向を考へるうえで重要な記述だと考へる。風を避けるため風下に向けられたテントの正面は、ちょうど日の出の方角と一致するのである。

太陽を神として崇めるのは、ほぼ全世界にあったことであるが、北方民族が生活した地域は極めて寒冷であることから、彼らの陽光への欲求には切実なものがあつた。匈奴から清代女真に至るまで、北方民族の大多数には太陽を祭つた記録がある⁽¹⁸⁾。たとえば右にあげた匈奴の記録には、彼らの首長である单于は毎朝日の出を拝したとある。日の出は太陽神が再び誕生する瞬間である。きつとその新たな日の光を浴びれば自分も新たな力を得ることができると信じていたのであろう。

くりかえすが、風を避けて東に向けられたテントの正面は、ちょうど日の出の方角となる。朝にテントの口を開けば、再誕した太陽の光がテントの中に差し込む。朝の光はテント奥に座した家長を、そして神棚にある神位や神像を輝かせる。祭天儀式のときもこれと同じである。祭天儀式は、たいいてい野外で日の出のときに行われた。したがつてその日の最初の光が、西向する人々の眼前にある祭壇や神位を輝かせる。これは宗教的情景である。

テントを東向させると、こうしたことがおこる。とすればテントの東向は、単に風向きの問題だけでなく、そこに太陽信仰の作用も認めなければならぬであろう。もし風向きだけの理由からテントを東向させたのであれば、西方を尊ぶ思想が必ず起こるとは限らない。風向きは地形によってある程度変化する。風向きによってテントの向きが変われば、テント奥の方角も変わる。それならば、テント奥の位置は尚尊されると

しても、西方尚尊の思想は生まれ難い。たとえ生まれたとしても強くはないであろう。しかしそこに太陽を崇めるといふ信仰目的が加われば、テントは東に向けるべきものとなる。たとえその時々状況によつて他の方向に向けられたとしても、祭りなどの大切な日には、テントは必ず東に向けられることになる。そうなるとテントの奥は基本的に西となり、西の方角や位置が、確実に尚尊されることになる。

要するに北方民族、とりわけ遊牧民族が祭天のとき西向したのは、北アジアの気象条件によるテントの東向と彼らの朝日崇拜が合わさつて、西の位置に祭壇や神像を東向させて設ける習慣ができたためと考えられる。西向した祭天儀式の記録は、鮮卑と契丹のものしか残っていないが、おそらく契丹以前の北方民族の大多数も、みな同じように西を尊び、祭天儀式を西向して行つていたと推察する⁽¹⁹⁾。

四 南向して天を祭つた理由

つぎに南向して天を祭つた理由について論じる。但し南向の理由は少々複雑である。南向の記録を残した民族には、モンゴル帝国時代のモンゴル人(第一章の(四))と清代の満洲人(第一章の(五))があつたが、両民族の祭天文化は系統が違ふと考えられるからである。そこで論述を分かりやすく進めるために、モンゴルの場合から始めることにする。

(一) モンゴルのテントの南向

モンゴル帝国はテントを南向きに張つた。テントの向きは祭天方向を考へるのに重要であるから、まずこの点を確認しておきたい。

モンゴルのテントの向きは、次に引く例のように、大部分の記録が南と記し、一部が東南と書いてある。

(蒙古) 其居穹廬……主帳南向、

(『黑韃事略』)

其營必挾高阜、主將駐帳、必向東南、

(同右)

南向はモンゴル帝国時代とは限らない。現代モンゴルの遊牧民も南向である。ただし南向といっても、それは磁石が指す南ではなく、そこから東に約45度ずれた方位であることが多い。民族的な方位感覚による南である。したがって南は、磁石の方位からいへば東南と言つてもよいことになる⁽²⁰⁾。

かつて東向きにテントを張つていた民族の、東という方角は、日の出の方角であつた。日の出の位置は季節によつて変わる。冬至のころになると日の出は東南の方角になるが、それも東である。そうすると、南といつても東といつても、余り違わないこともある。そのためか、北方民族の古記録にある東向や南向は全く同じ方向だとする見方がある。しかし筆者はそうは思わない。たとえ昔の人であつても東と南の区別はあり、これを混同することはなかつたと考ええる。太陽が現れる方角が東である。沈む方角が西である。そしてその間太陽が辿る方角が南である。たしかにこの分け方では各々方角にはかなりの幅ができるから、方角を磁石で見る現代人には、ずいぶん不確かに見えるであろう。しかしそれでも、古記録にある方向は、昔の人が確かに観察した結果である。要するに東と南は、やはり東と南、別々の方角と見なければならぬ。

とにかくモンゴルのテントの向きは南であつた。しかしこれはいささか奇妙なことである。モンゴルより前の契丹や鮮卑らのテントの向きは、みな東向きだつたからである。モンゴルの祭天の方向もかわつてゐる。契丹や鮮卑がみな西向であつたのに、モンゴルはそれを南向して行つてゐる。すでに述べた理屈から言えば、テントを南向させれば、祭天儀式の向きは北となる。テントの正面を南に向ければ、テント奥の北が尊位となるからである。ところがモンゴルは天をテントの向きと同じ南の方角に祭つた。

モンゴルの活動地域は契丹や鮮卑らとほぼ同じであつた。生活形態も同じ遊牧であつた。それなのになぜ、モンゴルはテントの向きを変え、祭天儀式の拝礼方向を変えたのだろうか。もしこれをモンゴルの全く独

自の習俗だと理解するのであれば、疑問とするに足りない。しかし契丹や鮮卑だけでなく、おそらく北アジアの草原遊牧民の全てがテントを東向させ、西向の祭天儀式を行っていたと考えられるのに、モンゴルだけが違ったというのは不思議なことである。もしかするとモンゴルも、かつては他の民族と同じ形をとっていたのだが、それが何かのせいで変わったのではなからうか。

筆者は、この問題については、モンゴルの習俗に変化が生じたものと考ええる。そう考える理由は、モンゴル帝国が生まれるすぐ前の時期に、中国北方を支配した金朝が、新たに住居を南向させる生活と南向の祭天儀式を作り出していたからである。

(二) 金代女真の住居と祭天の南向

まず金代女真の住居が東向から南向に変化したという事実。これについては、筆者はすでに「神祖を西壁に祭った満洲族の習俗について」で論じたので⁽²¹⁾、ここにはその要点のみを述べる。

女真はツングース系民族の狩猟民で、もと小興安嶺以東の森林の中で生活していた。彼らは移動の先々で木を切ってテントを建てて生活し、テントの正面を東に向けていた。東に向けたのは、もちろん西風を防ぐためである。ところが女真は、やがて山林を出て満洲の平地で農耕を営むようになった。このため彼らの生活が定住化し、住居は固定式の家屋になった。家屋は、はじめ小さく拙い構造のものであったが、中国の建築様式を取り入れて、しだいに中国と変わらぬ家屋を建てるようになった。その中国の建築様式では、出入り口を南に設けるのが通例である。このため女真の住居もみな南向するようになった。この南向の形は、なおも北方の森林でテント生活をおくる女真にも波及した。モンゴルがテントを南向させたのは、時期的にみてきつとこの女真から影響を受けたものであろう。

次に祭天の拝礼方向についてであるが、金代女真が南向の儀式を行っ

ていたことを言うには少し論証が必要である。金朝の祭天儀式には詳しい記録があるものの⁽²²⁾、拝礼の方向が明記されていないからである。因みにその記録を引くと次のようである。

金因遼旧俗、以重五・中元・重九日行拜天之礼、重五於鞠場、中元於内殿、重九於都城外、其制、剝木為盤、如舟状、赤為質、画雲鶴文、為架高五六尺、置盤其上、薦食物其中、聚宗族拜之、若至尊則於常武殿築臺為拜天所、重五日質明、陳設畢、百官班俟於毬場樂亭南、皇帝靴袍乘輦、宣徽使前導、自毬場南門入、至拜天臺、降輦至褥位、皇太子以下百官皆詣褥位、宣徽贊拜、皇帝再拜、上香、又再拜、排食拋盞畢、又再拜、欽福酒、跪飲畢、又再拜、百官陪拜、引皇太子以下先出、皆如前導引、

（『金史』卷三五、礼志八）

ここに記されているのは、主として重五の日に常武殿に於いて行われた祭天儀式である。祭場の周りにはいくつかの建物があるので、ここから拝礼方向が割り出せそうであるが、建物の位置関係が不詳なのでそれができない。しかし筆者はこの記録とは別の諸点を根拠として、金代女真の祭天方向を南であったと推定する。

まず金朝の宮殿が南向していたこと。これは金代城址の調査によって確かめられている⁽²³⁾。南向の建築様式は中国に従ったものである。金代の城は、遼代とは違って明らかに君主の南面を意識した構成になっている。この事実は、金朝の儀礼の根底にあった神聖な軸線が、東西ではなく南北方向であったことを示している。

つぎに、金朝の朝日儀が奇妙な形で行われていたことである。朝日儀は、いうまでもなく中国王朝伝統の太陽を祭る儀式である。普通このときには東向して日の出を拝する。ところが金の皇帝は、南向の礼を行った。

其親行朝日、金初用本国礼、……天眷二年、定朔望朝日儀、皇帝服靴袍、百官常服、有司设炉案・御褥位于所御殿前陛上、设百官褥位于殿门外、皆向日、宣徽使奏導皇帝至位、南向、再拜、上香、又再拜、

……(大定十五年)有司援漢・唐春分朝日、升煙奠玉如圜丘之儀、又按唐開元礼、南向設大明神位、天子北向、皆無南向拜日之制、今已奉勅以月朔拜日、宜遵古制、殿前東向拜、詔姑從南向、……

〔金史〕卷二九、礼志三、朝日儀

臣下がみな東の日の出を見ているのに、皇帝ひとり南向するというのは、他の王朝に無かった特殊な形である⁽²⁴⁾。担当官はこれを問題視して改めるよう進言したが、皇帝は聞き容れなかった。右の文の初めに「金朝は本国の礼、すなわちかつて満洲に居たときの儀礼を用いた」とあるから、金代の女真は太陽を南向して祭る習慣を持っていたのであろう。そのため皇帝は臣下に中国的作法を行わせながらも、自身は旧習を堅持したのであろう。このように金代女真は太陽を南に祭る習慣を持っていたから、その一方で天神を神聖な軸線から外して西に祭ったとは考え難い。それよりも、天神も太陽神と同じように、南に祭ったと見る方が適當である。

もう一つの根拠として、満洲族すなわち清代女真の祭天の柱と金代女真の祭天の柱の相似もあげられる。満洲族は神杆とよぶ柱を立て、その柱の上方に斗を設けて供物を入れ、天を祭った⁽²⁵⁾。金代の女真は高い架上に舟状の盤を置きそこに供物を入れて、天を祭った⁽²⁶⁾。両者の形状はやや違うものの、柱を立て、その上に器を設けて供物を高くかけたところが共通している。満洲族は、この神杆を南方に立て、南向して天を拝した。とすれば満洲族の先祖に当る金代女真も、きつと同じように南向の儀式を行っていたであろうと推察される。因みに契丹や鮮卑など草原地域の遊牧民の祭壇は、女真とは違っていた。契丹や鮮卑らは、木柱や神像を立て、その前に犠牲を供えるのが普通であった。

こうした諸点から導き出される金代女真の祭天方向は南である。これは彼らの住居の向きとも一致する。この金は遼を滅ぼすと約百年の間、中国北方の覇権を握った。モンゴルが草原地域の伝統から外れて南向の祭天を行ったのは、おそらくこの金の影響を受けたためであろう。やが

てモンゴルが大帝国を築くと、金から受け取った南向の形式は帝国の全土に広まった。このせいで草原地域伝統のテントの東向と西向の祭天は衰えてしまったのであろう。第二章(二)にあげたダフルの南向儀式は、こうした歴史の流れを汲むものと考えられる。ダフルは女真と同じツングース系民族で、女真とモンゴルのほぼ中間の地域に生活してきた民族である。

なお『蒙轡備録』に、モンゴルの祭天が金の影響を受けたことを伝える記事があるので次に引いておく。これはチンギス・ハーン十六年のときの様子を記したものである。

〔轡人〕正月一日必拜天、重午亦然、此乃永住燕京、襲金人遺物、飲宴為樂也、
〔蒙轡備録〕風俗の条

(三) ツングース系民族のテントと祭天の東向

ところで前章では、金代の女真が南向の祭天を行っていたことを論じたが、これは女真が固定式住居に住むようになったあとの習慣である。その昔テント生活をしていたとき、女真はテントを東に向け、天を東向して祭っていて、それがやがて南向に変化したものと考えられる。東向の祭天をしていたのは女真に限らない。これは大陸東部の森林に生活したツングース系民族に普遍的な形であったと考えられる。

ツングース系民族が祭天を行っていたことは歴史記録に明らかであるが、天神がどのような神なのか、どの方向を見て儀式を行ったのかということまでは記されていない。とはいえ関連諸史料および調査研究をもとにすれば、この点は十分に推察できる。

一、現代のオロチョンなど、ツングースの古文化を残す少数民族が、テントを主として東向させ、祭祀を東向して行っていること。第二章(一)、(三)はそうした例である。

一、その東向は、日の出の方角に向いているのであり、そこには太陽崇拜が強く働いていること⁽²⁷⁾。

一、歴史記録からは、北方民族のうち西方草原地域の狩猟遊牧民が祭った天神には絶対神的な性格が、東方森林地域の狩猟牧畜民が祭った天神には太陽神的な性格が窺われること⁽²⁸⁾。

一、遼代契丹の記録には太陽や東方を拝する儀式、儀礼が甚だ多く、これはツングースからの影響と推測されること⁽²⁹⁾。

これらの事象はみな、ツングース民族にとって太陽神が天神の中で最も重要な神であったこと、そして彼らが天を東向して祭っていたことを示している。

それならばなぜツングースの一つである女真是、祭天方向を東から南に変えたのか。これについては、女真の生活の変化から理解できるであろう。前節で述べたように、女真是もと森林の狩猟民であり東向のテント生活をしていたが、やがて森を出て満洲の平地で農耕を営み家屋に住むようになった。その家屋は中国建築の影響を受けて東向から南向になった⁽³⁰⁾。これによつて女真の首長は常に南面して座るようになった。また生業の中心が農耕に変わったことによつて、その信仰にも変化が生じた。彼らが森の中で崇めた太陽は、光明と暖気を齎す神であり、朝に再誕の靈力を与える神であった。ところが農耕に従事するようになると、太陽は作物の実りを左右し、女真の生活に直結する一層重要な神となった。そうなると彼らには朝日だけでなく、日の出から夕べに至る太陽のすべての力が必要となり、朝日よりも南天の太陽の方をより強く信仰するようになった。彼らが祭天儀式を南向して行うようになったのは、こうして家屋南向の事情や南天の太陽に対する信仰が重なった結果であろう。

農耕生活ゆえに南天に対する信仰が強くなったことは、中国と似ている。太古より農耕を営んだ中国は、主要な建築物を全て南向きに建てた。君主は南面して座った。天を祭るときは、都の南方に祭壇を設けた。こうして南を尊ぶ中国人の思想の起源は極めて古く、自然崇拜に発して理論化されたものと考えられる。この理論と実践が記された中国の古典によれ

ば⁽³¹⁾、この思想が南天の太陽と関係していることが明らかである。女真の祭天にこの中国の思想が影響したことも大いに考えられる⁽³²⁾。

女真の南向の祭天はこうして始まった。そしてこの南向は、草原地域の遊牧民たちに影響を与え、ともに、女真是じめツングース系民族に長く受け継がれて、今日に到っている。

結 び

以上述べてきたように、北方民族の祭天儀式における拝礼の方向は、北アジアの自然条件や彼らの生活形態などがもとになって定まったと考えられる。そしてそこには太陽信仰が大きく作用したことが認められる。現在北方民族の間で行われている祭天での拝礼方向は、主として東と南である。しかし唐代より前は違っていた。

大興安嶺以西の遊牧民族、おそらく匈奴から契丹にいたるほぼすべての遊牧民族は、西の位置に祭壇を設け、西向して天神を拝していた。天神には幾種もの神があったが、彼らが最も崇めたのは天空の至上神であった。この西向の形式は、彼らのテントの東向と太陽信仰によって成立したものと考えられる。

いっぽう大興安嶺よりも東に活動した狩猟牧畜民の間では、太陽を天神として崇める傾向が強く、東の位置に祭壇を設け、東向して礼拝するのが主流であった。

ところが大興安嶺の東側、満洲の狩猟牧畜民であった女真が農耕を始めたとき、古来の拝礼方向に変化が生じた。農耕のために生活形態を変えた女真是、東方よりも南方の太陽を崇めるようになり、祭天の方向を東から南に変更した。そしてこの南向の祭天は、西の草原地域にいたモンゴルにも影響を与え、旧来西向していたモンゴルは南向して祭天を行うようになった。現在北方民族の祭天儀式に西向の形が殆ど見られないのは、金・元代に広まった南向の形式に駆逐されたためであろう。

唐代以降、中国奪取の意志を強めた北方民族は、中国の文化を積極的
に取り込んだ。このため彼らの祭天儀式も中国の儀礼的色彩を帯びるよ
うになった。しかし彼らは、儀式的肝心な部分は、これを守り通した。
拝礼方向もその一つである。北方民族の拝礼方向は、中国のように北向
にはならなかった。

さて筆者は、本稿ならびに旧稿の「神祖を西壁に祭った満洲族の習俗
について」によって、北方民族の祭天に特定の拝礼方向があったことを
指摘し、そしてその方向が尊崇された理由について一説を示そうとした。
しかし諸民族の宗教文化の交流がかなり複雑であったため、この全体を
まとめきれなかった。モンゴル人の拝礼方向について、まだ触れていな
いことがある。これについてはまた別稿で論じることしたい。

註

- 1 拙稿「北魏における西郊について——鮮卑拓跋部の二つの祭天形態が語るも
の——」（『東海女子短期大学紀要』二五、一九九九）
- 2 北魏末の権臣、匈奴系生まれの爾朱榮にも、行宮の西北で祭天を行おうとし
た記録がある。その西北というのも、西と同じ意味で選ばれたものであろう。
（武泰元年四月）十三日、榮感武衛將軍費穆之說、乃引迎駕百官於行宮西北、
云欲祭天、……因縱兵乱害、（『魏書』卷七四、爾朱榮伝）
- 3 島田正郎『契丹国——游牧の民キタイの王朝』（東方書店、一九九三）
- 4 島田正郎「契丹の祭祀」（『民族学研究』一四—二、一九四九、『遼朝史の研
究』所収、創文社、一九七九）、拙稿「遼祭山儀考」（『東海女子短期大学紀要』
二六、二〇〇〇）
- 5 拙稿「モンゴルの祭天儀式——モンゴル帝国から元朝の間について——」（『東海
女子大学紀要』二六、二〇〇七）
- 6 『清史稿』卷八二、礼志一、壇壝之制
- 7 石橋丑雄『北平の薩滿教に就て』（一九三三）
- 8 満洲族の祭天の神杆について、閻崇年氏は「満洲の先民が神樹とそこに棲息

する神鳥を祭ったもの」とする説を出している（『満洲神杆祀神考源』（『歴史檔
案』一九九三年、第三期、『満学論集』所収、民族出版社、一九九九）。しかし
金代女真にもよく似た機能をもつ神架があり、木枝を立てた祭天の壇が北アジ
ア諸民族に広くあつた事実を見ると、もつと広い視野から天と関連させて眺め
る必要があると思う。

- 9 赤松智城・秋葉隆『満蒙の民族と宗教』第二章第一節（一九四一）
- 10 9を見よ。
- 11 泉靖一「大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告」（『民族学研究』三一
一、一九三七）
- 12 関小雲・王宏剛『鄂論春族薩滿教調査』第四章第四節三（遼寧人民出版社
社、一九九八）、『オロチョン族のシャーマン』黄強・高柳信夫等訳、萩原秀三
郎監訳、第二章第六節（第一書房、一九九九）など。
- 13 12を見よ。
- 14 ハルヴァは、農耕を行うようになった遊牧民レベジ・タタールの祭祀を記して、
「農耕文化の普及とともに各地でその数を増している、こうした明るい季節に行
われる祭りは、ふつう天神のためのものである。白いいけにえ動物、東と南へ
向かつての跪拜、白樺が供物樹として不可欠であることなどもまたこのことを
証明している」と論じている。（ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム
——アルタイ系諸民族の世界像——』（三省堂、一九八九）
- 15 島田正郎『遼制の研究』第二編第二章第二節五、拜日儀（一九五四）、
同氏「祖州城」（一九五六）、島田正郎・竹島卓一編『中国文化史蹟』増補東
北篇（法蔵館、一九七五）、張国慶・朴忠国『遼代契丹習俗史』（遼寧民族出版
社、一九九七）など。
- 16 トーボー・フェーガー『天幕——游牧民と狩猟民のすまい——』（磯野義人訳（エス・
ピー・エス出版、一九八六）
- 17 『後漢書』卷九〇、鮮卑伝
- 18 拙稿「北アジアより朝鮮に至る古代の祭天について（上）」「同（下）」（『東海
女子短期大学紀要』一三、二二、一九八七、一九九六）
- 19 突厥の祭天儀式も、西向であつたと考えられる。後掲の諸研究によれば、突
厥の遺跡はみな東に向いているという。遺跡の多くは墓のようだが、中には祭

祀場の跡と思われるものもある。ある遺跡には、祭儀のときの柱の跡や供物の犠牲を焼いた跡がある。ある遺跡には、神像が東向きに建てられている。またある遺跡には、列石が東方に向かって伸びられている。こうした遺跡を見れば、文献記録に書かれてはいないが、突厥は天神や死者、先祖を西向して祭っていたと考えられる。

大澤孝「古代テュルク系遊牧民の埋葬儀礼における動物供儀―石人・石圍い遺跡における関連遺物を中心に―」（小長谷有紀編『北アジアにおける人と動物のあいだ』（東方書店、二〇〇二）所収）、同「新疆イリ川流域のソグド語銘文石人について―突厥初世の王統に関する一資料―」、林俊雄「ひげ付き」クルガンの分布―文化は国境を越えて―」（松原正毅・小長谷有紀・佐々木史郎編『ユーラシア遊牧社会の歴史と現在』国立民族学博物館研究報告別冊二〇号、一九九九）所収。

20 小長谷有紀『モンゴル草原の生活世界』（朝日新聞社、一九九六）

21 拙稿「神祖を西壁に祭った満洲族の習俗について―北方民族の住居の東向と西方尚尊の關係―」（『東海女子大学紀要』二七、二〇〇一）

22 拙稿「金代女真の信仰―祭天を中心として」（『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』所収、朋友書店、一九七九）

23 鳥山喜一『北満の二大古都址』京城帝国大学満蒙文化研究会報告第二冊（一九三五）、園田一亀『吉林・濱江両省に於ける金代の史蹟』満洲国古蹟古物調査報告第四編（一九四二）

24 朝日儀で君臣ともに朝日を拝するのは、ほぼ全ての王朝に共通していた。太陽神を祭るのであるから、朝日を拝するのが自然な形であろう。唐代にこれを北向して行うよう定めたのも特殊である。『大唐開元礼』には次のようにある。

未明五刻、太史令・郊社令、升設大明神座於壇上北方、南向、席以藁藉、設神位於座首、（卷二四、吉礼、皇帝春分朝日於東郊、陳設の条）

ちなみに『大唐開元礼』は、月を祭る夕月の儀式も、朝日儀と同じ形で行うよう定めている。

25 7を見よ。

26 22を見よ。

27 18を見よ。

28 18を見よ。

29 前掲拙稿「遼祭山儀考」

30 21を見よ。

31 例えば『易』には、八卦を自然現象にひきあてながら、こう述べられている。離也者明也、萬物皆相見、南方之卦也、聖人南面而聽天下、嚮明而治、蓋取諸此也、（説卦伝）

また『礼記』には、

君之南鄉、答陽之義也、臣之北面、答君也、

とあり、また

郊之祭也、迎長日之至也、大報天而主日也、兆於南郊、就陽位也、

（卷二一、郊特牲）

とある。これらによれば、中国の南を尊ぶ思想が南天の太陽と関係していることが明らかである。

32 中国の祭天儀式である郊祀は、太古より南方の位置で行われた。祭壇や神位をどのような形にするか、どのように配置するかといった細かなきまりについては議論百出で、時代によってすべて異なるという有様であった。とはいえ君主が拝礼する方向は、常に北向であったと言つてよい。

樋口隆康『北京原人から銅器まで』（新潮社、一九六九）、北京大学歴史系考古教研室商周組編著『商周考古』（文物出版社、一九七九）、増田福太郎『中国の俗信と法思想』（三和書房、一九六六）など。